

日 誌 君 一 四 八 二 月 五

朝日新聞の仮面 完結篇

「論壇時評」の偏向と欺瞞をつく

辻村明 あきら 東京大学教授

朝日の「論壇時評」は、自由主義の精神にもとることはないか。入れ代り、立ち代り進歩的文人ばかりが登場して、仲間うちのなめ合いに終始している現状は、自由主義社会における言論の自由とは似て非なるものである。

先月号は都留氏の論壇時評(41年)まで扱ったので、次は長洲氏担当の分に入る。

先月号でいくつかの誤植があったので、まずそれを訂正しておきたい。一四三ページの第六表「言及頻度ベスト26」において、25位「永井陽之助」氏の「総計」欄において、下段がゼロになっているところを2と訂正、またその三人あとの「福田恆存」氏の「総計」欄において、同じく下段の7を8に訂正、また一四九ページ下欄終りから二行目、中ソ同盟条約破棄の時期を、54年から55年に訂正。

二年半の長洲氏の担当の最後、氏自身が「私の時評は、中国文革にはじまり大革命に終わった(44年3月25日)」と述懐しているように、この時期の主な出来事は、中国の文化大革命、チェコ事件、大学紛争である。文革は余りにも日本の常識からかけ離れたので、論壇においてもさまざまの見方に

いずれも単純な校正のミスであった。

(4) 文化大革命から大学紛争まで

命の理想を、ソ連が忘れた「前人未踏の大実験」として評価する。……

第四は、文革非永統説。文化大革命は毛沢東の「最後の闘争」、そして結局は「最初の、決定的な大敗北」に終るとするマーク・ゲイン(『文藝春秋』)……

第五は、いわば客観的な理解派の人びと(42年2月23日)。
このような整理をしたうえで、長洲氏は次のようにまとめている。

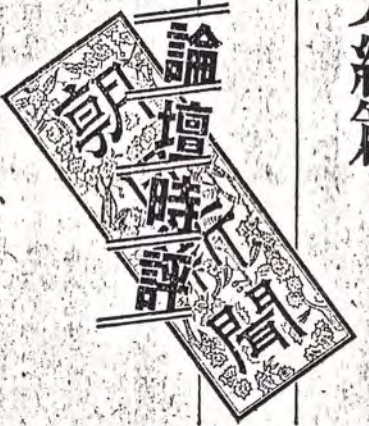
「いずれにせよ明らかにってきた問題点は——
中国は決して、異常な狂気、だけがあるのではない。よかれあしかれ、中国の問題は現代世界の問題である。現代のあらゆる問題が、ただし、いささか露出過度の状態にあるのだ。思想的にはそれは、マルクス主義と現代史の戦いと言ってもいい(同)。

第二の批判説のところ、内外の反共派は一応別にして」という言葉があるように、長洲氏は反共派を問題外としてとりあげないわけである。そして氏自身の立場は第一の支持派か、第三の批判的共感派に属することに

わかれた。それを長洲氏が五つのタイプに分類しているのは参考になる。

「今月は、解釈や評価のタイプがひとつたり出そろって来たように見える。おおよそだが、私なりに整理してみよう。

第一は、いわば支持派。文革と毛思想にほぼ全面的に共鳴し、これを肯定する。『エコーミスト』一月三十一日号座談会(岩村三千夫、新井宝雄、藤井満洲男)や、先月紹介した酒井角三郎(『展望』)などがそれだが、最も明確なのは新島淳良(『現代の



眼」座談会。文革と毛思想は「人間の全体的回復を真つすべく志向」する。「○○%マルクス主義」で、「ブルジョア的世界観に本当に対立する」唯一最高の世界観と見る。総じて原始マルクス主義ともいへべき理念への回帰にたいする共感が強いようだ。

第二は、これと正反対の批判説。内外の反共派は一応別にして、マルクス主義の立場に立つ論者に多い。最近訪中した中嶋嶺雄は、『中央公論』への寄稿はじめ今月のほとんどすべての雑誌に顔を出しているが、文化革命は『文化』でも『革命』でもなく、『政治内戦化した権力闘争』にすぎぬと見る。ほぼ同傾向の見方は、力石定一(『思想の科学』2月号)はじめ多いが、最もまとまった議論は、佐藤昇のもの(『現代の理論』)であろう。彼によれば……毛体制はまさに『中国版スターリン主義』である。

第三は、前二者のいわば中間で、批判的共感ないし共感的批判説。菊地昌典(『展望』朝日ジャーナル2月26日号)は、個人崇拜などの点に批判的だが、文化大革命